

陽気な人たちと熱心な人たち

野田俊作

要旨

キーワード：

フランスの哲学者テイヤール・ド・シャルダンがこんな話をしています。

たとえ話として、山へ登るときのことを考えましょう。ある人たちは、出発した途端に後悔しはじめます。前途の長い道のりや、そこにひそむかもしれない危険は、何もしないうちからその人たちを疲れさせてしまいます。その結果、その人たちは、遅かれ早かれもと来た道を引き返してしまいます。この人たちのことを、彼は『疲れた人たち』と呼びます。

第二群の人たちは、陽気に歩いて行きますが、苦勞する気はありません。すこしでも苦勞しなければならぬことになったら、ただちに仕事を放りだして、そこらあたりで遊んで暮らそうと考えています。この人たちは、すくなくとも山の麓まで、ひょっとしたら山の中腹まで、たどり着くかもしれません。けれども、苦勞なしに頂上をきわめることなどありえないので、いつかきつと脱落して、途中の景色を楽しむだけで終わってしまいます。この人たちのことを、彼は『陽気な人たち』と呼びます。

第三群の人たちだけが山頂にまで達します。この人たちだけが未来に向かって飛躍する人たち、ほんとうの意味での幸福に到達する人たちだと、彼は言います。この人たちを彼は『熱心な人たち』と呼びます。

日本のアドラー心理学運動の現状はどうでしょう。熱心な人たちがいったいどれだけいるのでしょうか。陽気な人たちはたくさんいます。ある程度、毒にならない程度に、生活が根本的に変わらない程度にアドラー心理学を学んで、そこで止まってしまって、先へ進もうとしない人たち。そういう人たちが邪魔になるわけではありません。その人たちはアドラー心理学の消費者です。消費者の存在はたいせつです。消費者なしにアドラー心理学運動は成り立ちません。

しかし、アドラー心理学の未来を切り開くのは、その人たちではないのです。生産者がいなくては、アドラー心理学は滅びます。たえず新しいものを産み出す、創造的な活動に挑戦してゆく、少数でいいから熱心な人たちの存在がないと、アドラー心理学の明日は危ういのです。

突然、話が変わりますが、学生時代に、機嫌よく弁当を使っていると、クラスメートがやってきて、「お前がそうして弁当を食っている間にも、ベトナムでは人々が殺されているんだぞ、それにたいして何もしないで弁当を食っているお前は、その人たちを殺しているのも同然だぞ」と言いました。私は考えこんでしまいました。奇妙な理屈ではあるが、なるほどそう言われればそうだ。しかし、反戦デモをしたところで、ベトナム戦争の死者が減るわけではない。では、私は何をすればいいのか。

いくら考えても何もできそうにないので、しかたなく戦争犯罪人として責任を感じて弁当を食

べ続けることにしました。その後、ずいぶん経ってからの話ですが、アドラーが、「育児と教育から暴力的構造をなくしてしまえば、人間の攻撃性は減って、戦争はなくなる」と、やたら楽観的なことを言っているのに出会いました。これが本当なのか嘘なのか、私は知りません。しかし、これ以外に戦争をなくす方法を私は知らないのです。そこで、アドラー心理学を学ぶことにしました。これは、私の戦争責任の取り方なのです。

ペルシア湾でもたくさんの方が死にました。東欧でもひと騒ぎありそうです。アドラーが配ってくれた種は、まだまだ刈り取れません。それどころか、植え付けさえ済んでいません。この種をなんとしても植えなければなりません。これは、戦争だけではなくて、人類の不幸の、全部ではないかもしれないが、多くの部分を解決するに違いない種です。そういう自覚をもった『熱心な人たち』が必要なのです。私の言うことは狂信的でしょうか？

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載